

---

# 人妖が望んだ儚き夢

銀鳩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人妖が望んだ儚き夢

### 【Nコード】

N7471Y

### 【作者名】

銀鳩

### 【あらすじ】

現代世界とは違い、妖怪や神々、妖精らが集う不思議な土地  
幻想郷。

そんな人外魔境の幻想郷で、自由気ままに生きる一人の男を描いた  
お話。

ほのぼの路線でやっていくつもりです。基本駄文、更新速度鈍亀。  
誤字脱字、キャラ崩壊、自己設定等も含まれますので、地雷原に特  
攻したいという方のみご覧下さい。



## プロローグ（前書き）

どうも、この度東方小説を書く事となった銀鳩です。

処女作なので、文章力は底辺に近いレベル……まさか小説書くのがこんなに難しいとは思わなかった。

これは作者の妄想混じりの小説ですので、原作ブレイクが嫌な人は戻る事をお勧めします。

作者の糞駄文を見て忍耐力をつけたい！ という方のみ閲覧推奨します。

## ブローグ

障子や襖等、日本の和室を連想させる造りをした部屋の片隅で、一人の男が目を覚ました。

男はそれまで自分の身体を覆っていた染みだらけの布団を払いのけ、ゆっくりとした動作で立ち上がる。

ぼろぼろに千切れた衣服を引きずりながら、のっしのっしと歩を進める。

五、六歩ほど歩き、今にも壊れてしまいそうな朽ちた机の前まで来ると、男は歩みを止め、首を下に向けて机を見下ろした。

机の上には手紙がひとつ。長々とした長文が、とても丁寧な筆跡で書かれていた。

男はそれを手に取ると、無表情のままぐしゃぐしゃに握り潰し、机の隣へ放り投げた。

同じように潰れて丸くなった手紙の山に、先程潰した手紙が上に乗る。

手紙を捨てる。それが眠りから覚めた男が始めにする事だった。

毎日毎日、手紙はどこからともなくやってくる。男はその度に丸めて捨てる。一文字すら読まずに。

手紙を捨て終わると、男は四方を囲む襖の一つを開いた。

そこには池や庭石が置かれた美しい庭園……ではなく、男を覗く無数の目玉と、黒ずんだ紫色で塗りつぶされた空間が、どこまでも果てしなく広がっていた。

常識的にありえない。しかしそんな異様な光景を目の当たりにしても、男は眉一つ動かさず、淡々と外を眺めている。常人が見ればおかしくなりそうなこの光景も、男にとっては既に見慣れた景色だった。

男はしばらく棒立ちのままじっとしていながら、やがて飽きたのか襖をぴしゃりと閉め、また布団の中へと戻っていった。

ここがどこなのかはわからない。

現世？ 冥界？ いいや、どちらも違う。

ただ一つ言える事は、ここが男を罰する為に用意された牢獄ということだ。

密室となっているこの部屋だけが、男が存在する事を許された唯一の場所であり、今の男の全てだった。

男は二度寝から目覚めた。日付が変わったかどうかはわからない。太陽や月が見えないこの部屋では、時間の感覚など曖昧だ。否、長い監禁生活の所為で、もはや時間という概念自体が失われている。

男は確認するように辺りを見渡す。

全部いつも通り。何一つ変わった物はない。

やる事もないので再び眠りにつこうとしたその時、男は襖の外で妙な違和感を感じ取った。

急いで襖を開けてみると、いつもと変わらない目玉と空間。格別おかしい箇所などどこにもなかった。

気のせいかな。そう思い、男は襖を閉じようとしたが、下の方からピキピキと、ガラスにヒビが入るような音が聞こえた。

音に気づいて見下ろすと、空間にヒビ割れが生じ、その隙間から竹

林の景色が映しだされていた。

男は戸惑う長い年月をここで費やしてきたが、こんな事は始めてだった。そして戸惑いと同時に一つの考えが脳裏をよぎる。あそこに飛び込めば、この現世と隔絶された空間からでられるのではないかと。

だが絶対にそうなるとは限らない。失敗すればどうなってしまふのか……………考えただけで身の毛がよだつ。

しかし、このまま何もしくともこの牢獄に囚われ続けることとなるのもまた事実。男は、覚悟を決めた。

片足を部屋の外へ伸ばす。体を襲う浮遊感に身を束ね、徐々に体を傾けながら落下しそうなる……………が、寸前のところで足を引っ込めた。

男は少しの間目を閉じた後、くるりと反転し、丸めた手紙の山に近づいていき、一番上にある今日潰した手紙を手にとって懷に押し込んだ。

手紙をしまい終え、再び先程の位置に戻る。そして何かを呟いた直後。

今度は躊躇無く足を踏み出した。

男は消えた

いつも胸に抱いていた一つの想いと共に

## 嵐の永遠亭（前書き）

はい、超展開ですね。自分でもわかっているんですが、この話の雑さと文才の無さは多分直らないでしょう。

今回は永遠亭キャラがでるよ！生温かい目で見ていってね！



## 嵐の永遠亭

四季の中でも一、二を争うほど過ごしやすいとされる秋の季節も終わりを見せ始め、本格的に冷え込んできた11月半ばのある日の夜。太陽が沈みすっかり暗くなった永遠亭の門前に、携帯サイズの箱を持った一人の人影があつた。

「へくしゅっ！ うう、寒…… 思いのほか遅くなっちゃった…… やっぱりに薬売りなんて向いてないと思うんだけどなあ……」

くしゃみをしながらそう小さく呟く声の主は大きな木製の門を開け、ブツブツと独り言を言いながらゆっくりと歩いていく。

およそ数百人は入るであろう庭を通り越して玄関まで辿り着くと、入り口に取り付けてある灯籠が、

暗闇のせいであつたらしく見えなかった姿を鮮明に表していく。

白のブラウスに赤いネクタイ、更にその上に紺色のブレザーを着用し、下は白を多く含んだ薄桃色のミニスカートを穿いている。

腰まで伸ばした薄紫色のロングヘア、頭の上に生えている少々長めな兎の耳に特徴的な真つ赤な瞳。

容姿や服装、声の高さからして、この声の主が少女であることは間違いないだろう。

少女は玄関の戸を開け自分が帰ってきたことを知らせると、誰かが畳を歩く音と共に手前の襖が開いた。

「おかえり鈴仙。今日は随分遅かったね」

「ただいまてゐ。私もこんなに時間が掛かるとは思ってたわ」

襖からでてきた少女、いや幼女が玄関先の少女に話しかける。そし

て鈴仙と呼ばれた少女も、同じように恒例の挨拶を交した。

幼い顔立ちにくせ毛の短めな黒髪、その上にはふわふわとした兎耳が生えている。

身長は低く、人参を模ったペンダントを首にぶら下げ、桃色のワンピースを着た幼女、因幡てゐが迎えにでてきたのである。

波長を狂わす狂気の瞳を持つ月の兎、鈴仙・れいせん・うごんげいん優雲華院・イナバと人間を幸せにする力を持つ地上の妖怪兎、いなば因幡てゐ。この二人は永遠亭の住人である。

他にも二人の師である薬師やこの屋敷の主人、てゐの部下の妖怪兎たちが住んでいる。

それぞれが自分に与えられた仕事をこなしながら、忙しくも充実した日々を送っていた。

ちなみに鈴仙の仕事は全容全般。

主のお守りや師の手伝い、家事やお使い等が主な内容である。

今日も仕事の一つである人里への薬売りを終え、ようやく自宅へと帰ってきた。

そして今は今夜の夕食を作る為に一緒に調理場へと向かっている。

「はぁ……今日はもうお風呂入ってすぐに寝たいわ……」

「鈴仙がそんなに疲れてるなんて珍しいね。人里でトラブルでもあったの？」

疲れの混じった声で喋る鈴仙に、てゐが何があったのかを聞きだそ

うとする。

「そんな面倒事には巻き込まれてないわ。薬が飛ぶように売れて忙しかっただけよ」

「あー……それで手間取っちゃったってわけかあ。鈴仙って人付き合い下手だもんね」

痛い所を衝かれたのか、「うつ……」と、唸る鈴仙と納得した、という表情のてゐ。

そんな小言を話していると、いつの間にか目的地の調理場まで到着していた。

中へ入ると複数の妖怪兎、通称イナバが食事の準備をしていた。

手伝おうかと思ったが既に作業は殆ど終了しておりやる事が見つからなかったので、てゐは用事がある為自分の部屋へ、鈴仙は帰宅した事を自分の師匠へ報告しに行った。

同じ様な外見の景色をしばらく歩いた後、とある襖の前で立ち止まる鈴仙。

そして目の前にあるその襖を、スパーンと勢いよく開けた。

部屋の中は薄暗く、周りは不気味な色をした液状の物体が入った瓶を収納した薬品棚で囲まれており、中央には机に向かって熱心に何かを書いている人物が座布団に座っていた。

「師匠、ただ今戻りました！」

声に気づいたのか、機械の様に高速で動いていた筆はぴたりと止まり、師匠と呼ばれた人物が鈴仙のいる方向に振り返る。

「あらウドンゲ、おかえりなさい。こんな遅い時間に帰ってくるな

んで、一体どんな道草を食ったのかしら？」

赤と青を基調とした左右できっちり色分けされているツートンカラーに所構わず星座が描かれている珍しい服。

長い銀髪は三つ編みにし、頭の上には赤十字のマークが刻まれている青のナース帽を被った女性が、やや皮肉った口調で返事を返した。

彼女の名は八意永琳。やじろえりんありとあらゆる薬を作り出す事ができ、この永遠亭を実質的に仕切っている凄腕の薬師である。

「その…今日は沢山薬が売れて忙しかったので…」

「人見知りの貴方は緊張していつもより時間が掛かってしまった…  
…つてところかしら？」

「はい……」

必死に弁解する鈴仙の顔を見て、瞬時にして何があったのかを悟った永琳。

「そんなに構えなくてもいいわ。少し遅れたくらいじゃ怒ったりしないから」

「あ、ありがとうございます！」

それまでと会った時よりもさらい暗い感じになっていた鈴仙だったが、永琳の言葉を聞いた途端暗かった表情がぱっと明るくなった。おそらく永琳に叱られると思っていたのだろう。

安堵した鈴仙を見た永琳は苦笑を浮かべた後、さらに言葉を続ける。

「何はともあれご苦勞様。他に伝えることはある？」

「はい。そろそろ夕食の時間なので師匠も少し休憩してはどうかと思ひまして」

「うーん……そうね、わかったわ。それじゃあ食事にしましょうか」

永琳は先程書いていた手帳な様な物を机の中にしまい立ち上がると、鈴仙と一緒に食堂のある方へ歩いて行った。

「そつえば、今日は竹林の様子が少し変なのよね」

食堂へ向かっている途中、不意に永琳が口を開いた。

突然発せられた脈絡の無い話題に、どう反応して良いのかわからず戸惑う鈴仙。

「変……ですか？」

鈴仙はいろいろ考えた結果、最初に頭に浮かんだ疑問をそのまま永琳にぶつけることにした。

「ええ、今日は何かザワザワしてると言うか……何時もと比べて騒がしいというか……まるで嵐がくる前触れみたいな感じなの」

「そうなんですか？ 私は特に何も感じませんでしたけど……」

「……やっぱり私の思い違いかしら……」

永琳がそう言い終えた直後、後ろから一人のイナバが「永琳様ー！」と大声を出しながらこちらへと走ってきた。

「あらあら、そんなに慌てて走ったら転ぶわよ？」

「す、すみません！　で、でも、大事な用があるんです！」

「「大事な用？」」

まったく同時のタイミングに喋り、見事に声が重なった永琳と鈴仙。

「は、はい！　とにかく私に付いて来て下さい！　は、早くしないと……！」

声は震え、体はおどおどと落ち着きがなく、何か恐ろしいものを見たような青ざめた顔から、

二人共ただ事ではないという事だけは理解できた。

「……すぐに案内しなさい」

いつもの様な穏やかな表情は消え、鋭い目付きへと変わった永琳。その威圧感に一瞬たじろぐイナバだったが、すぐに正気を取り戻し、青ざめた顔に戻った。

「は、はい！　こつちです！」

そう言うときイナバは振り返りさつき自分が通ってきた道へと走って行き、その後を永琳と鈴仙が追いかける。

「それで、一体何が起こつたの？　いつものあなたたちからは想像もつかない慌てぶりなんだけど……」

まだ状況が理解できていない鈴仙が走りながら説明を求める。するとイナバはびくりと全身を震わせた後、おぼつかない声で話し始めた。

「つ、ついさつき救急の患者さんが来たんですけど……その人、体中傷だらけで……今にも死にそうなんです!!」

イナバが簡潔に説明を終えると、永琳の表情が一段と険しくなった。

「……で、その患者はどこにいるの？」

「玄関にいます！ 別の場所に移そうと思ったんですけど……大人の人だから私たちだけじゃ持ち上げられなくて……」

「無理に運ばなくてもいいわ。下手に動かして失血死でもされると大変だから」

「そうですか……。あ！ 見えてきました。あそこです!!」

走り続ける事早数分、ようやく見えてきた玄関を力強く指差すイナバ。

その指先の方向には一足先に現場に着いていた因幡てゐと数人のイナバ、そして粘り気のある血糊がべったりとへばり付いた壁にもたれかかっている一人の男の姿があった。

すぐに男のもとへと駆け寄ったが、その無残な姿に永琳達は驚愕した。

顔こそ目立った外傷は無いものの、靴を履いていない両足と右腕の皮膚は醜く焼けただれ、千切れた衣服の隙間から見える身体はいくつもの創傷が痛々しく刻まれており、腹部に巻かれた晒は大量の血を吸いドス黒く変色している。

そして、男には本来付いているはずの左腕が、肩ごと丸々無かった。普通の人間ならとくに死んでいてもおかしくないほど傷だらけだが、男は吐血しながらも荒い呼吸を繰り返し、まだ完全に事切れてはいなかった。

「……息はあるみたいだけど、かなり危険な状態ね……。てゐ、ウ

ドンゲ！ 彼をすぐに医務室に運んで！ くれぐれも慎重に運ぶように！ 落としたら承知しないわよ！！」

男の脈を確認した後、怒鳴りつけるような大声で指示をだす永琳。それまであたふたとしていたイナバたちも、永琳の一言ですぐさま我に返った。

「いい、てゐ？ そーっと持ち上げるのよ？」

「う、うん。わかつてるよ……お、重い……！」

鈴仙とてゐは先程永琳に命令された通り、なるべく傷口を刺激しないようにゆっくりと男の体を持ち上げると早歩きで医務室へと向かって行っただ。

道中、男から発せられる怨霊のようなうめき声に耐えつつ長い長い廊下を歩くと、ようやく医務室の表札が書かれた襖が見えたことで少しほっとする鈴仙とてゐ。

しかし安心したのもつかの間、この後には男を治療するという大仕事が続いている。二人は深く深呼吸をし息を整えると、意を決して前にある襖を開いた。

「遅いわよ！ 何をもたもたしてるの！ 早く彼をこっちに連れてきなさい！」

襖を開くと同時に、手に持った薬品を丹念にチェックしている永琳の怒号が飛んできた。

どうやら既に準備は終わっているらしく、永琳の傍にはふかふかの真っ白な敷き布団が引かれており、その隣には、剪刀や鉗子、輸血パックなど手術で使うような専門的な物から、

ガーゼや包帯、消毒薬といった一般の医療器具まで幅広く揃えられ



ていた。

鈴仙とてゐが男を布団へ寝かすと永琳は手馴れた手つきで素早く道具を持ち、さっそく治療を始めようとする。

……が、ほんの僅かな間硬直した後、なぜか道具を元の場所へと戻し始めた。

「……？ 師匠、どうかしたんですか？」

突然の謎の行動を取る永琳に困惑する鈴仙。

どうして早く彼を治療しないのか。

早くしないと取り返しがつかなくなってしまうのではないだろうか。なのになぜ、自分の師は動きを止めているのだろうか。

鈴仙のそういった考えは尤もだったが、永琳から返ってきた返事は鈴仙にとって予想外の言葉だった。

「ウドンゲ、貴方はこの部屋から出なさい」

「……え！？」

鈴仙は理解できなかった。これまで永琳が仕事をする際は、全てとはいかずも大抵は鈴仙が補佐を勤めていた。

だから今回ももちろん自分が手伝うものだと思っていた。

「ど、どうしてですか！？」

あくまで平常を装っているが、やはり動揺を隠し切れない様子の鈴仙に、永琳はその理由を話した。

「どうしてって、そんなの決まっていますでしょう。 貴方が血を見

たり、誰かが苦しむ姿を見るのが嫌いだからよ。

これからこの部屋は、おびただしい量の血液が飛び散り、痛みに喘ぐ声が響き渡るわ。貴方、そんな所に長時間居て耐えられる？

一瞬たりとも目を背向けずに、彼の治療を続けられる？」

「ですが……！」

「それに貴方、今もびくびく震えているじゃない。そんな危なっかしい手先じゃ、とても患者は任せられないわ」

言われて初めて、自分の身体が小刻みに揺れていることに気づいた鈴仙。

なんとか動きを止めようと必死に腕を押さえるが、いくらやってもその震えは止まらない。

「もういいわウドンゲ。ここは私に任せて、あなたは自分の部屋に戻ってなさい」

「っ……」

永琳の言葉に責めるような調子は一切含まれていなかったが、鈴仙は何も言葉を返す事ができなかった。

実際に永琳の言っている事は正しい。今の手元がおぼつかない状態の鈴仙では、役に立つどころか足手まといになり得る。

最悪、些細なミスのせいで男が死に、それが彼女の新たなトラウマになってしまう可能性すらあった。

永琳が部屋をでていく様に命じたのも、全て鈴仙を思っただけの言葉だった。

鈴仙もそれをわかってか、反発する様な事は何もせず素直に永琳の言葉に従った。

「……わかりました……失礼します……」

今にも消えそうな声でそう言うと、鈴仙は永琳を一瞥した後、襖の奥へと消えていった。

「鈴仙……」

これまでの一部始終を見ていたてゐがぼつりと呟く。何か言いたげな表情をしているがそれ以上は一言も喋らず、鈴仙が出て行った襖をじっと見つめていた。

そんなてゐを尻目に、一人黙々と手を動かす永琳。

「……てゐ、今回はあなたに手伝ってもらっわ。……やれるわね？」

「……はい」

「そう。なら、すぐに始めるわよ」

以降は二人共無言になり、永琳は先ほど持っていた道具を再び握り締め、男の治療を再開した。

## 嵐の永遠亭（後書き）

というわけで第一話更新です！

何？ 駄文乙？ 皆の性格と口調が違う？

ごめんなさい、勘弁して下さい。これが作者なりに考えた結果なんです。

さて、一体次回はどうなるのやら……

## 目覚めた男（前書き）

えーと……その……あらすじに書いてあったほのぼの路線、今の話の流れを見るとはつきりいつて詐欺に近いです、はい。

もう少しこの殺伐とした雰囲気が続きます。のんびりしたい人ごめんなさい！（そもそも見てる人いるのかどうかわからないんですけどね）

## 目覚めた男

永遠亭に謎の男が転がり込んでから丸1日が経過した頃、屋敷の中はイナバたちの様々な憶測が飛び交っていた。いつもは静かな永遠亭も、今日に限ってはざわざわと騒々しい。

「あの男の人、あれからどうなったの？」

「昨日廊下で鈴仙様がどこかに運んでいるところを見たよ。それから先はわからないや」

「あんなにぼろぼろってことは、妖怪にでも襲われたのかな？」

等々、どこもかしこも男の話題で持ちきりだった。

だが当の本人はまだ医務室の中に籠りつきりな為、現状がどうなっているかはまるでわからなかった。

好奇心に負けたイナバが医務室の中を確かめようとする出来事も何回あったが、中から聞こえる人とは思えない悲鳴に恐怖し、誰も中を確かめる気にはなれなかった。

今では中を確かめるどころか辺りに近づく者さえ殆どいなくなっていたが、一人だけ例外がいた。

その一人とは他の誰でもない、鈴仙だ。その後、永琳に命令され一度は自分の部屋に戻りはしたものの、やはり気持ちの整理がまったくつかず、ましてやこのまま眠ることなど到底できなかった。

とは言っても、中に入れば即座に永琳に追い出されるだろう。役に立たないと言う言葉と共に。

勿論その事は鈴仙も十分知っていた。

今の自分にできる仕事は何も無い。しかし、男が助かるようにと祈る事是可以。そう考えた鈴仙は、できるだけ近くで祈りを捧げようと、こうして医務室の前までやって来たのだ。

そして現在は襖の横で体育座りで両手を組み、永琳が出てくるのをひたすら待ち続けていた。

「あの……鈴仙様、大丈夫ですか？」

声に気が付いたのか頭の上の兔耳がぴくりと揺れ、それまで頂垂れていた頭を重たそうに上げる鈴仙。

見上げると、そこには心配そうに鈴仙の顔を覗き込んでいるイナバの姿があつた。

「……ええ……大丈夫よ……」

「でも、すごく顔色が悪いですよ……もう夜も遅いですし、今日はお休みになられた方が……」

イナバの言う通り、鈴仙の顔はお世辞にも良いとはいえなかった。

昨日まで健康的だった肌の色は病人の様に青白く染まり、キラキラと光っていた赤い瞳はすっかり輝きを失い、その下には大きな隈ができていた。

「心配してくれてありがとう……でも本当に大丈夫だから……」

誰がどう見ても明らかに無理をしていたが、やはり鈴仙の返事は変わらなかった。

「そうですか……分かりました。でも本当に気をつけて下さいよ？ 鈴仙様まで倒れてしまったら笑い話にもなりませんから……」

イナバは最後まで鈴仙を気遣う台詞を残すと、そそくさと何処かに行ってしまった。

その後姿を見送った後、再び元の姿勢に戻る鈴仙。

結局、この日は永琳がでてくる事も、男の悲鳴が止む事もなかった。

どれくらいの時間が経っただろうか。

長かった夜はすっかり明け、空高くには太陽が上がりその下を小鳥が楽しそうに飛んでいる。

時刻は朝、いつも寝坊気味のイナバたちもそろそろ目覚める時間になっていた。

……と言っても全てのイナバが自然に起きるわけではなく、たまたま早く起きた少数派がまだ寝ている者を起こしていくので、まだ全体の7割弱は夢の世界の住人の仲間入りをしている。  
それと、夢を見ていたのはイナバたちだけではなかった。

「ううん……人參に蜂蜜かけるとすつごくおいしいのお……」

医務室の前で聞こえる小さな寝言。そこには、小動物のように丸まった鈴仙が眠っていた。

昨夜までは気合と根性で何とか眠気を抑えていたのだが、人里での薬売りと今まで一睡もしていない疲れが重なり、ついに睡魔に負け寝てしまったのだ。



口元は緩み、すうすうと寝息をたて幸せそうに眠る鈴仙。そんな鈴仙を呆れた眼差しで見つめる一人の女性がいた。

「……まったく、何やってるのかしらこの娘は……」

女性はふう、とため息をつく、鈴仙の肩をゆさゆさ揺らした。

「起きなさいウドンゲ。こんなところで寝てると風邪ひくわよ」

「えへへ……師匠、いくら大好きだからって、私はそんなに食べられませんよぉ」

しかし女性の行動もむなしく、鈴仙が起きる気配は一向にない。

「もう、早く起きないと新薬の実験台にしちゃうわよ」

「うひゃあ!？」

女性がそう言った瞬間、鉄砲弾のような勢いで飛び起きる鈴仙。薬の実験とはそんなに恐ろしいのだろうか。

「すみません師匠!　どうかそれだけはご勘弁を……って、あれ?」

鈴仙は目覚めてまだ間もないが、先程の言葉がよっぽど強烈だったらしく意識だけははつきりとしていた。

だが現状は完全に把握できていない為、立ち上がって辺りを見回している。

するとすぐに自身の目の前に立っている女性、八意永琳と目が合った。

「……そんなに嫌がらなくなたっていいじゃないの……」

「え、あ!　し、師匠!　ということは……」

何時の間にか声が止んでいることに気づいた鈴仙。

そして目の前には永琳。それ即ち、治療は既に終了しているということだ。

鈴仙は期待と不安を混じらせた顔で永琳を見つめる。

永琳も鈴仙が何を言いたいのかはよくわかっていた。

「ええ、ついさつき終わったところよ。……何とか一命を取り留めることができたわ」

「よ、よかったあ……」

安心したのか、体からすっかり力が抜け、へなへなとその場に座り込む鈴仙。

「本当、久しぶりの大仕事だったわ。ショック症状を起こしたから麻酔は使えなかったし、

身体は身体で器官はズタズタ、肺は片方潰れてるわで、大変なんてレベルじゃなかったわね。

それに――

身体の損傷具合や治療の詳細を数分間かけて細かく語り始める永琳。ようやく話が終わる頃には、彼女自身もしゃべり疲れたといった感じだった。

「……で、どうして貴方はここに居るのかしら？ 私は部屋に戻れと言ったわよね？」

「そ、それは……」

永琳の質問にはつきりとした説明ができず、言葉を濁す鈴仙。

普通に祈っていたと言えればいいのだが、どうも答えたくないらしい。

しかし執拗に続く永琳の問いかけに耐え切れなくなり

「……………祈ってました……………」

耳を澄ましてようやく聞き取れる程度の声で白状した。

「……………祈ってたの？　一晚中ずっと？」

「……………はい」

「そう……………ふふっ」

「？　師匠、どうかしました？」

どこか嬉しそうな笑みを浮かべる永琳に疑問を感じた鈴仙が質問するが、永琳は質問には答えず、ただ微笑を浮かべるばかりだった。

「さて、それじゃあ私は姫に報告をしてくるわ。一昨日からずっと会っていないから心配してるだろうし。

ウドンゲも少し休んだ方がいいわよ。顔に疲れがでてるから」

永琳はそれだけ言い残すと、欠伸を噛み殺しながら姫と呼ばれる人物の部屋へと足を進めた。

一人残された鈴仙は、これからどうするべきかを考える。

「確かに疲れも溜まってるけど、まずは……………」

鈴仙は言葉を言い終える前に、手前にある襖を慎重に開いた。

「う……凄いいおい……！」

襖を開くと同時に鈴仙の嗅覚を刺激したものは、やはり血の臭いだっ  
た。

しかし、部屋の中は想像していたよりも遥かにさっぱりとしていた。  
血の臭いこそ充満しているものの、畳や柱にはこれといった汚れは  
なく、どこからと言えば綺麗な方だろう。

血しぶきが飛び散った形跡もありなく、強いて言えば男が眠る布  
団の周りが少し赤く染まっている位しか指摘する事がない。

おそらく永琳が極力汚さないように工夫しながら治療したのだろう。  
そうでなければこれ程清潔さを保つことなど不可能の筈だ。

だが男の隣に座っている人物は違った。見覚えのある桃色のワンピースや幼い顔には、時間が経過し赤黒くなった血の塊がいくつも張り付いている。

「てゐ！」

その姿に思わず叫んでしまい、親友であるてゐの元へと駆け寄る鈴仙。

「……………ああ、鈴仙か」

反対にてゐから返ってきた返事はとても素っ気なかった。それにいつものような元気も無い。

「この人なら大丈夫だよ。とりあえず峠は超えたから、しばらくは問題無いと思う」

「そうじゃなくて……」

「じゃあこの血？ そんなに心配しなくても後でちゃんと拭くから……」

鈴仙はもちろん血の事も心配していたが、それ以上にてゐの体調を心配していた。

「てゐ、一度自分の部屋に戻ったら？ かなり具合悪そうじゃない」「いや、私はしばらくこの人の様子を見てから今はいいや。お師匠様にもそう言われてるし」

てゐも鈴仙と同じように男の心配をしていた。普段こそ”悪戯兎”と称されている彼女だが、本当はとても素直で優しい心を持っている。

尤も、その本心がでてくることが非常に稀なのが玉に瑕だ。どれくらい稀かというと花畑に入ったとき、自分の足元の花が全て四葉のクローバーだったというくらい稀である。

なので、今回の件は特に珍しいといえるだろう。

「それに、万が一容態が急変でもしたら大変だから……」

そして今もてゐは男の看病を続ける気でいた。それが今の自分のできる最良の選択だと信じているからである。

「そう。……だったら、私もここに残るわ」

「え？」

「聞こえなかった？ 私も残るって言つたのよ」

「な、なんで？」

てゐには鈴仙の考えがよくわからなかったが、その理由は本人が説

明してくれた。

「私も、この人には助かって欲しいから……。それに、一人より二人の方がいざという時素早く行動できるでしょう？」

布団の中で死んだように眠る男を、どこか悲しそうな表情で見つめながら話す鈴仙。

「……うん、確かにそうだね……。じゃあ、お願いしちゃおうかな……」

せつかなので、鈴仙の好意をありがたく受け取ることにしたてゐ心なしか、その顔は先程までと比べると少しだけ明るくなっていた。

「……」

二人が男を見守ること早数時間。

鈴仙もてゐも何か気分を盛り上げようとはしたのだが予想以上に話す話題が思いつかず、部屋の中は気まずい空気が漂っていた。

「……静かね……」

沈黙を最初に破ったのは鈴仙だった。それに釣られるように、てゐもずっと黙っていた口を開く。

「うん……さつきまでの悲鳴が嘘みたい。……そう言えばこの人、どこから来たんだろう?」

いまだ目が覚めない男を横目でちらりと見るてゐ。

それまでは忙しさのあまり顔もろくに確認できなかったが、今ならじっくりと眺められる。

どうせやる事もあまりないので、てゐは男の観察をして時間を潰すことにした。

年齢は20代後半から30代半ばといったところだろうか。

顔は怪我のせいか些かやつれており、顎の下には少量の無精ひげが生えている。

男にしては珍しく長髪で、背中まで伸びた白髪は黒い紐で後ろに束ねられ、肌の色も髪と同じく真っ白だ。

「見たところ人里の人間っぽいんだけど、それだったら竹林の中になんか入らないはずだし……」

「確かにそうね……あつ、もしかしたら外来人かもしれないわ」  
「なるほど、確かにそれだと納得できるかも」

鈴仙の言う外来人とは、幻想郷に張られている結界が何らかの理由で不具合を起こし、それが原因でここに流れ着いた現代の人間を指す言葉である。

ただし大抵の外来人は出てくる場所が悪く周辺に生息する妖怪に喰われるか、どこに進めばいいのかわからずのたれ死ぬかでその短い一生を終えてしまう。

一方で人里の人間はよほどの重用がない限り里から離れようとはし

ない。

それもそのはず、この人里は”妖怪の賢者”と呼ばれる大妖怪によって保護されているので里の中にいれば安全だが、ひとたび外に出ると理性の無い下級妖怪に襲われる危険性があるからだ。

よって二人は男を外来人と判断し、たまたま竹林に迷い込んだところを妖怪に襲われたが何とか逃げ切り、運良く永遠亭に辿り着いたという仮説を立てた。

そんな事を考えていると、襖が開き一人のイナバが中に入ってきた。

「ああ、やっぱりここでしたか」

台詞からして、どうやら二人を探していたみたいだ。

「たった今昼食の支度が整ったので、お二人に報告に参りました」

「あ……もうそんな時間なのね……」

鈴仙もてゐは今までずっと時計を見ていなかったたので、イナバに言われてようやく現在の時刻が昼であることに気がついた。

それにしばらく何も食べていないこともあってか、二人ともとても空腹だった。

「ねえ鈴仙、ちょっとくらいなら平気だよね？」

「まあ……多分……」

どうやらてゐは食べ物への誘惑には弱いらしい。

鈴仙はここを離れるか空腹を満たすかでしばし悩んだが、やはり誘惑に勝てず後者を選んだ。

それでも男の看病という役目は十分に果たしただろう。そう結論付



けた二人は一旦医務室を後にする事にした。

「……ただ座ってるだけっていうのも退屈なものね」

その後、久しぶりの食事でありついた鈴仙とてゐ。

食事自体は二人とも手早く済ませたが、てゐは服を着替えてから戻る事にしたので、今の医務室には鈴仙と例の男しかいなかった。

「せめて、寝息だけでもあったらいいのに……」

鈴仙は数時間前と何一つ変わっていない今の状況に少し嫌気がさしていた。

一番の原因は、この静寂。

元々鈴仙は騒がしいよりは静かな方が好みだが、今だけは音が欲しかった。

何か変化がなければ、ずっとこのままかもしれないという不安が募るからだ。

「ふあゝあ……この際私も寝ちゃおうかな……」

どうせ自分が起きていても変わることなど何もない。そう考えた途端、急な眠気に襲われた鈴仙は、その心地よさのあまり意識を手放しそうとする……が、脚に感じる違和感によって遮られた。

恐る恐る自分の脚へ目をやると、布団から投げ出された男の右腕が、

鈴仙の左膝を掴んでいた。

「ん……つつ……！」

まだ傷が傷むのか痛みには耐えるような低い声を漏らしながら、それまで閉じられていた男のまぶたがゆっくりと開いた。

周りを確認しているのか、まだ焦点の合わないぼんやりとした黒い瞳は何度も左右へ動く。

一方鈴仙は、男の手が自分の膝を掴んだことにまだ驚いていた。

「ど、どうしよう！ 師匠に報告……いやその前に……でも……！」

あまりに突然の出来事に頭が混乱していた鈴仙だったが、しばらく混乱した後、ようやく男の視線が自分に向けられていることに気づいた。

「え、えつと……その……こんにちは？」

とりあえず話しかけてみる鈴仙。だが男からの返事はなく、代わりに鈴仙の予想の斜め上に行く言葉が返ってきた。

「……可愛い」

それが男の第一声だった。

## 目覚めた男（後書き）

はい。おっさんが目覚めました。お気づきの方もいるかもしれませんが、一応彼がこの小説の主人公です。少女成分多い幻想郷に10代越した見た目のおっさんは違和感がががが

まあ、あれです。この小説は作者の妄想ですので、細けえことはいんだよ！！

## 自称人里の人間（前書き）

「???」こんな小説じゃないわ！ ただの駄文よ!!」

「???」だったら批判の感想を送ればいいだろ!!」

というわけで三話目、始まるよー！

## 自称人里の人間

「かつ……!？」

先程男から発せられた可愛い発言のせいで、みるみる内に顔を赤く染める鈴仙。

「ん？ 俺、何か変なこと言ったか？」

男の方はなぜ鈴仙の顔が赤くなったのかわからない、といった表情をしている。

「君、ひよつとして熱か？」

「ち、違うわよっ!」

「そうか、ならいいんだ。それともうひとつ質問があるんだが」

「こ、今度は何…？」

「手、どけないのか？」

そう、鈴仙の膝には今も男の右手があつた。

「……………あっ」と声を漏らしたあたり、すっかり忘れていたようだ。

「気づいてるなら自分でできればいいじゃない……………」

「そうしたいのは山々なんだが手が動かなくてね。どうやら君の膝を気に入ってしまったらしい」

何とも軽い調子で話す男に呆れる鈴仙だったが、男が手を離さないとわかった以上自分でやるしかないので渋々その手を取り元の位置に戻した。

「いやーすまない、余計な手間をかけさせてしまつて」

「これくらい何でもないわよ。……それより本当に手、動かないの？」

「指なら動くんだが、まだ腕そのものを曲げたり伸ばしたりするのは駄目みたいだ。あつ、でも足ならちゃんと動くぞ」

そう言うと、男は自分の足をわざとらしく動かしてみせた。

しかし顔は若干ひきつっている為、まだ傷は癒えていないようだ。

「無理して動かさなくてもいいわ。まだ痛いでしょうから」

「な、なんのこれしき……！」

「あーもう！ 怪我人は大人しく寝てなさい！」

無理矢理起き上がろうとする男を布団に押し付ける鈴仙。

「しばらくそのまま寝てて頂戴。動いたら駄目だからね！」

「むう……わかったよ」

「わかればいいのよ。……さて、それじゃあ行かないと」

「行くつて、何処へ？」

「私の師匠の所。貴方が起きた事を報告しに行くのよ」

男は、なら俺も連れて行ってくれ！ と言おうとしたが、気配を察したのか物凄い形相でこちらを睨む鈴仙の迫力の前には、さすがに黙らざるを得なかった。

「……まだ なにか？」

「イイエ、ナンデモゴザイマセン」

男がカタコトで返事を返すと、鈴仙は襖を開ける前に、絶対だからね！ と強く念を押してから出て行った。

男はしばらく呆然としていたが数十秒には我に返り、また天井を見始めた。

「中々気の強い娘だなあ」

先程の鈴仙に対する感想なのだろうか。男は唐突に独り言を呟いた。その後も髪が綺麗だとか顔が可愛い等、誰もいない部屋で男の声だけが訝した。

やがてその感想も言い終わり、今度こそ静かになったかと思いきや、またしても男は口を開いた。

「……俺、まだ生きてるんだよな……」

それまでヘラヘラとしていた男の顔が、急に無表情になった。

当たり前だが男は生きている。だが男にはそれが実感できなかった。全身の痛みも、柔らかい布団に包まれた感触も、胸の中で脈打つ心臓の鼓動だって感じられる。

だから自分は生きている。生きている筈なのに、生きている心地がない。

自分に起きた出来事全てが他人事のように感じた。他人の人生を傍観しているように思えた。

「それでも、俺は生きている……」

なぜ生きているのかはわからない。けれど、自分には人生の目的がある。

だからそれを達成するまで死ぬ訳にはいかない。

そこまで考えると、男は悩んでも仕方ないと見切りをつけた。

いくら考えても答えはでない。それよりも今は助かった事に感謝し、

残りの人生を楽しんだ方が得だろう。

そう結論付けると、男はどこか吹っ切れた表情を浮かべると同時に、重大な事を思い出した。

「あ、お礼言うの忘れてた」

「ふむ、つまり俺を助けてくれたのは八意先生なのか。俺はてっきりうどんちゃんが助けてくれたと踏んでいたんだが……」

「正確には師匠とてみただけだね。あとうどんちゃんって言うな！」

「まあまあ、別にいいじゃないそれくらい。私も結構気に入ったし」

「鈴仙はいつもお堅いんだよ。もうちょっと柔らかくならないと」「てゐはともかく師匠まで!？」

鈴仙が永琳を連れて戻ってきたのは四半刻程経った頃だった。

医務室の襖を開けると、そこにはいつの間にか戻ってきていたてゐが男と談笑していた。

やがててゐとの話が終わると、男は永琳と鈴仙に簡単な自己紹介をされた後、これまでの経緯と永遠亭について聞くことになった。

しかし話が進むにつれて男は退屈そうな顔になっていき、拳句の果てには途中で話を終わらせてしまった。

本人曰く、自分を助けてくれた事さえわかれば後はどうでもいいらしい。



「永遠亭の話をしてても全然驚かないってことは……あなた、もしかして人里の人間？」

「……………ああ、そうだよ」

妙に長い間を置いてから、男は永琳の質問に答えた。

鈴仙とてゐは、何だ、外来人じゃないのか、程度しか思わなかったが、永琳だけは男の返答に違和感を覚えた。

「……………まあその話は置いておくとして……。にしても、本当に鈴仙とてゐは兎なのか。うーむ……………やっぱりどこからどう見ても人間なんだけどなあ」

この男、話の流れをぶった切るのだけは得意である。

「兎っぱいところなんて耳と尻尾位だもんね」

てゐはそう言うのと、自分の頭の上にある耳をちょんちょんと指す。

「それと、私たち以外にも永遠亭には私に似た兎がいっぱいいるよ」

「なんだと！？ まだ他にもいるのか！？」

「うん」

「おお……………」

急に男はとても満足そうな顔になった。

何故男が笑顔になったのかわからず、困惑の表情を浮かべる鈴仙とてゐ。

だが男の顔があまりにもにやけていたので、その表情はすぐに呆れへと変わった。

「なにニヤニヤしてるのよ……………」

「すっごい間抜けな顔になったね……」

容赦ないツツコミを浴びせる鈴仙にてみると、男の顔を見てくすくすと笑う永琳。

「だってさ、てめみたいな可愛い娘が沢山いるんだぞ。

つまりどこもかしこも美少女だらけ！ 男としてこれほど嬉しい事はない！」

瞬間、部屋の空気が凍りついた。

そして熱烈に語る男に贈られたものは、拍手ではなく、軽蔑を込めた三つの眼差しだった。

「うわぁ……」

「最低……」

「これは重症ね……」

てめ、鈴仙、永琳の順に、まるで汚い物でも見るような目で男を見る。

「いやー、そんなに見つめられると照れるじゃないか」

しかし男には全く堪えていないようだ。

はぁ、と深いため息を吐く三人。対照的に男はとても嬉しそうだ。

「ウドンゲに顔色が悪いって言われたから心配してたけど、どうやらその必要はなかったみたいね」

「おかげ様だね。先生にはとても感謝しているよ。あ、もちろんてめとうどんちゃんにも感謝してるぞ」

男から感謝の言葉を述べられ微笑む永琳とてゐだったが、鈴仙だけは沈んだ顔をしていた。

「あれ？　そういや先生とてゐが俺を助けてくれたんなら、うどんちゃんは何をしてたんだ？」

「あら、聞きたい？　それがウドンゲったら」

「師匠！」

永琳がいざ話そうとすると、男に聞かれないのか、鈴仙が話を遮るように横槍を入れてきた。

「……何？　ウドンゲ、人の話は最後まで聞くものよ？」

「それはそうですけど……」

「で、続きは？」

この男、どうやら空気も読めないらしい。

「ウドンゲったら、あなたが助かりますようにって、一晩中ずっと祈ってたのよ」

「えっ！？　そうなのかうどんちゃ……ん？」

男は目を大きく見開いて鈴仙を見る。その視線の先には、自身のスカートをぎゅっと握り締め、申し訳なさそうに俯く鈴仙がいた。

「あ、あら……ひょっとして俺、その時うどんちゃんに何かまずい事してしまったんじゃない？」

男は今までの態度とはまったく違う鈴仙の姿に戸惑いを隠せずつい不安を口走ってしまうが、その問いかけに答える者は誰もいない。

「……なあ先生、これって俺のせいかな？」

おそらく鈴仙は自分のせいで嫌な思いをしたのだろう、と考えた男だったが、いまいち自信がなかったので念の為永琳に確認してみることにした。

「そうね。確かにウドンゲがこうなっている原因の一つに、あなたも入ってると思うわ」

「……はあ……やっぱりな……」

できればこの予想は外れて欲しいと願っていた男だったが、永琳のお墨付きをもらった以上認めざるを得ずしばらく凹んでいたが、まずは鈴仙に謝ろうと決心した。

「ごめんな、うどんちゃん。聞けば、俺が君に迷惑をかけたみたいじゃないか」

本当なら土下座もしたかったのだが、今は満足に体を動かせないので言葉だけで鈴仙に謝罪する。

「……違うの」

蚊の鳴くような小さな声で、ようやく鈴仙が口を開いた。しかしまだ顔は上げず俯いたままだ。

「そうじゃないの……あなたは迷惑なんてかけていない……」  
「……じゃあ、どうしてそんな悲しそうにしてるんだよ」

男の憂いを帯びた目が、鈴仙をじっと見据える。

「だって……てゐや師匠は貴方を助けるために必死になって動いていたのに……私は怖くて動けなかった……ただ祈る事しかできなかった……！」

話が進むにつれて、鈴仙の声は震えを増していく。

「私は……あなたに何もしてあげられなかった……」

最後まで言い終わると、鈴仙の頬から一滴の涙が流れ落ちた。

永琳もてゐも鈴仙にかける言葉が見つからず、嫌な空気が流れ始めたが

「いいんだよ」

その中で一人、男が口を開いた。

「祈るだけでもいいんだよ。自分が何もできなかったからって、罪悪感なんか感じちゃ駄目だ。それと……ごほっ！　ごほっ！」

突然襲ってきた重苦しい咳によって、男の話は途中で中断される。

「まだ器官が治りきっていないのに喋りすぎよ。今後の生活に支障をきたしたくなければ、この辺りで黙っておきなさい」

「ごほっ……大丈夫だよ……そこまでやわな体じゃな……っ！」

ない、と言おうとする前に、ポトポトと音を立てて、鮮やかな赤い血が口から溢れ出た。

それ見たことか、と言わんばかりに顔をしかめる永琳。それまで俯いていた鈴仙も、顔を上げて心配そうに見つめている。

「げほっ！……ああー気色悪いい……血の味ってのは、何度味わっても慣れないな……」

男は口の中に溜まった血を全て吐き出すと、永琳の警告を無視して再び鈴仙に語りかける。

「えーと、どこまで話したっけ……そうそう、罪悪感なんて感じるなつてとこまでだったな。あと、うどんちゃんが俺に何もしてやれなかったってというのは語弊があるぞ」

「えっ……？」

「何間抜けな声だしてるんだよ。さっき自分でも言ってたじゃないか、祈ることしかできなかったって。それってつまり”俺の為に”祈ってくれたってことだろう？」

「それだけでも、俺にとっては十分すぎるほど役に立ってるよ」

「……………」

「納得いかないって顔してるな」

「当たり前じゃない！」

鈴仙の怒りを混ぜた声が部屋中に響き渡った。あまりにも突然の出来事に、目を丸くする永琳とてゐ。

「腕は動かない！ 身体中ボロボロ！今にも死んでしまいそうなくらい青ざめた顔！そんなの見せられて納得できるけないでしょー！」

声こそ荒げている鈴仙だが、顔は涙のせいでぐしゃぐしゃになっている。

彼女だって本当はわかっていた。男が心から感謝している事や、自分を責めるつもりなど毛頭ない事を。

だから余計につらかった。血の恐怖に打ち負け、あの場から逃げ出

した自分すら氣遣つてくれる男の優しさが。

「……ごめんなさい、急に怒鳴ったりして……」

こんなに大声を出すつもりはなかったのに、と深く反省する鈴仙。ここまで感情が爆発したのは、彼女にとって久しぶりの体験だった。

「……なあうどんちゃん。うどんちゃんは、今も俺の役に立ちたいと思ってるか？」

目頭に溜まった涙を袖で拭い終わった鈴仙に、男が静かな口調で問いかける。しかしその視線は鈴仙ではなく、天井へと向けた状態で鈴仙には男が何を言いたいのかわからなかったが、役立ちたいか役立ちたくないかの二択ならば、答えなど端から決まっている。

「そんなの、役立ちたいに決まってるじゃない……」

「よし。だったら、俺の願いを一つ聞いて欲しいんだ」

「……お願い？」

「そ、お願い。何もできなかったって言うんなら、代わりに俺のお願いを聞いてくれないか？」

男から発せられた謎の提案。これに乗るも乗らないも鈴仙次第だが、男の治療に貢献できなかったので断るわけにはいかなかった。

「……わかったわ」

「おお、聞いてくれるのか。ありがとう、やっぱり頼んでみるもんだな」

男は鈴仙の方に顔を向け直し、その青白い顔に笑みを浮かべる。

「じゃあさっそくそのお願いについてなんだが……」

ごくりと唾を飲む鈴仙。一体何を言われるのかと内心びくびくしていたが、男の返事は鈴仙の予想の斜め上を行った。

「とりあえず、俺の事で泣くの禁止な」

「……はい？」

「だから、俺に関係する事でうどんちゃんが泣くのは禁止するって言ってるの」

名案だろう、と言わんばかりに得意げに話す男に対して、想定外の言葉に不意を突かれてきよんとする鈴仙。

「他にも色々考えたんだが、まずはその泣き顔をどうにかしようと思ってな。そんな顔されてると、見てるこっちまで悲しくなっちゃう。」

皆のお陰で俺は助かった、これでいいじゃないか。うどんちゃんが気に病む必要なんてどこにもないんだ」

男は持てる限りの言葉を尽くして鈴仙を励まそうとするが、まさかこれが逆効果になるとは思わなかっただろう。

ようやく泣き止んだ鈴仙が、また大粒の涙を流して泣き出してしまった。

「……おいおい、頼むから泣かないでくれよ……もう泣くなってさつきお願いしたばかりじゃないか」

「だって……だって……！」

まるで子供のように泣きじゃくる鈴仙の姿に、男は思わずため息をついた。



これ以上何か言ってもプラスには働かないだろう。なので、彼女の身内である二人に助けを求めることにした。

「はぁ……先生もてゐも、見てるだけじゃなくて慰めるの手伝ってくれよ。さすがに俺一人じゃ荷が重過ぎるぞ」

「情けないわね。男だったら女の子の一人くらい自力で慰めてみなさい」

「私も自力で解決するに一票を入れるよ」

「……それができないからこうして頼んでるんじゃないか……」

「あらあら、随分根性なしなのね……まあいいわ。ほらウドンゲ、ハンカチ貸してあげるから、まずは涙を拭きなさい」

永琳は腰を上げて鈴仙の傍まで歩み寄ると、懐からハンカチを出して鈴仙に手渡した。

「ぐすつ……はい……すみません師匠……」

「……全く、手間のかかる娘ね、ウドンゲは」

渡されたハンカチで顔を覆い、泣き続ける鈴仙の背中を優しく撫でる永琳。そんな二人の姿を、てゐと男は温かい目で見守っていた。

「どう、これで少しは落ち着いた？」

「はい師匠。もう大丈夫です」

溢れ出る涙もようやく止まり、完全に、とはいかないまでも、ある程度は元気を取り戻した鈴仙。

その頬には、先程まで流していた涙の痕がくつきりと残っている。

「そう、なら良かったわ」

永琳は目を細めながらそう言うと、襖の上の壁に立てかけてある時計に目をやった。

「……つといけない。そろそろ支度しないと」

「？ 師匠、どこかおでかけになるんですか？」

時計を見るなり立ち上がった永琳に、隣に座っている鈴仙が質問する。

「ええ、ちょっと人里まで食材の買出しに行こうと思ってね。あそこのお店、夕方になると閉まっちゃうから早めに行かないと間に合わないのよ」

「珍しいですね。普段はイナバ達に任せっきりの師匠が外出なんて」「特に最近のお師匠様なんて、姫様にも引けをとらないくらい部屋にこもりきりだったもんね」

「……私をどこぞの引きこもりと一緒にしないでくれるかしら？ たまには外の空気を吸いたいだよ」

心外だ、といった感じの顔で、鈴仙とてゐを睨む永琳。

「ま、そういうわけだから、二人共留守番お願いね。夜までには戻るわ」

鈴仙とてゐに留守を任せ、永琳は部屋から出て行こうとするが、襖

に手をかけたところで動きを止めた。

「そうそう、忘れてたわ」

くると振り向き、布団で眠たそうにしてる男を見下ろす永琳。  
男も永琳の視線に気付き、同じ様に見つめ返す。

「私達の自己紹介は済ませたけど、貴方の名前はまだ聞いてなかったわね。よかったら教えてくれないかしら？」

少なくとも怪我が治るまではウチにいるんだから、いつまでも名無しさんなんて呼び方じゃあなたも嫌でしょう？」

「あー……それは確かに嫌だな……いやでも……まあいいか、うん」

男は永琳の質問に少しだけ悩んだ素振りを見せた後、ゆっくりと自分の名前を言った。

「秋喜あきぎだよ。冨秋喜ふあきぎ。先に断っておくが、さんは不要だからな」

ややぶつきらばうな口調で名を告げると、永琳は確認するように男の名を小声で復唱してから、ふむ、と軽く息を吐いた。

「いい名前ね。じゃあ秋喜、私はもう行くから、本格的な診察は夜にね」

そう言い残し、永琳は襖を開けて部屋から出て行った。

「やばい、最後の言葉にちょっとだけときめいてしまった」  
「……………」

この男、もうダメかもしれない。そう思う鈴仙とてゐであった。

## 自称人里の人間（後書き）

はい、三話目更新です。

ようやくこの嫌な雰囲気から開放されました。

次回からほのぼの路線でいけるよ！ やったね銀鳩ちゃん！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7471y/>

---

人妖が望んだ儚き夢

2011年11月27日14時55分発行